【ブータン】

幸せの国ブータンの暮らしと人生観に見る幸せの秘訣

前田知里

ヒマラヤの険しい山々に囲まれた幸せの国ブータン。どこか懐かしい色あせた写真の風景が郷愁を誘う国だ（写真1）。北を中国（チベット自治区）、南をインドと二つの大国に国境を接し、北限は雪で閉ざされた七〇〇〇メートル級の山稜、南部は標高一五〇メートルの平原に亜熱帯のジャングルが広がる。人口約六〇万人の隠れ里であった小国は、一九七〇年代の経済的発展重視の時代に、当時まだ一〇代であったブータン第四代国王が「国の豊かさはGDP（国内総生産）ではなくGNH（国民総幸福量）で図るべきである」と提唱して一躍有名となった。

写真1　ブータンの村の風景

二つの大国に挟まれたブータンは、常に侵略の脅威にさらされてきた。一九五九年、チベットは中国の占領下に入り、他のチベット仏教国ラダック、シッキムはインドに吸収された。ブータンのみが唯一のチベット仏教国として独自文化を守り続けている。近年までほぼ鎖国状態を続けていたブータンに入国する外国人には高額の観光税が課せられる。伝統衣装の着用が義務付けられており、未だに牛耕、自家採種を中心とする自給自足的な暮らしが残っている。GNHを切り口に語られることが多いブータンであるが、映画からその暮らしと人生観を考察してみたい。

ブータン映画の紹介

ブータン映画は、仏教の教え、呪い、迷信、魔術、輪廻転生などがテーマになっているものが多く、歴史の流れに忘れられたヒマラヤのシャングリラの風習や人生観が垣間見える貴重な資料だ。インドのボリウッド映画の影響を受け、壮大な自然を背景にロマンティックなメロディーが流れ、恋人たちが手を取り合って踊りで気持ちを表現するシーンが入る。そんなブータン映画をいくつか紹介する。

Travellers and Magicians

『Travellers and Magicians』は、カリスマ的なブータンの仏教指導者であるケンセー・ノルブがメガホンを握った作品だ。ケンセー・ノルブは、幼き頃、ジャムヤン・ケンセー・リンポチェの生まれ変わりとして指導者の座についた。「映画は精神を表現する曼荼羅であり、タンカ（掛け軸）である」とケンセー・ノルブは映画を製作した理由について語る。仏教精神を込めたこの映画は、インドのボリウッド映画の影響を受けた他のブータン映画とは一線を画する趣に仕上がっている。「欲望は心が作り出す幻である」。チベット仏教の教えを、美しい映像とともにセンセーショナルに伝える（写真2）。

舞台は現代ブータンと魔術の時代である古きブータンの二つのストーリーが交錯する。一か月前に田舎に赴任してきた政府の役人ドンドゥップは、イライラしながらゆったりとした時間を生きる村人たちを眺める。彼は、何もない退屈な村を抜け出し、夢の国アメリカに渡るため首都ティンプーを目指す。ところが、週に数本しかないバスに乗り遅れ、片道三日かかる旅路を、僧侶、リンゴ売り、少女とともにヒッチハイクで旅をする（写真3）。

ドンドゥップとともに旅する僧侶が昔話を語り聞かせる。魔術師の学校に通うタシは、どこか遠い国を夢見て修行から逃げ出す途中、山の中で遭難し、隠れ里で美しい女

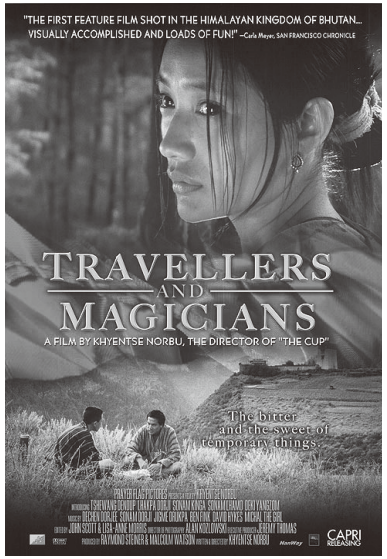

写真2『Travellers and Magicians』DVDパッケージ

写真３　僧侶、リンゴ売り、少女らと旅するドンドゥップ

性デキに出会う。彼女は年老いた夫と二人きりで山奥で生活していた。二人は恋に落ち、タシが魔術学校で習った薬草でデキの夫を毒殺しようと試みる。ホラー映画のシーンのように、一晩中雄叫びをあげる老人。タシは耐え切れず、山小屋から逃げ出してしまう。

アメリカを目指すのか？　老人を殺そうか？　旅人と魔術師は願望と現実の葛藤に陥る。自由の国に憧れるドンドゥップは現代ブータンの象徴である。電気も機械もないシンプルな暮らしを送っていたブータンに近代化・情報化の波が押し寄せ、現代のブータンの若者はいろんな魅力にさらされている。ブータンは昔のままであるべきなのか、本当に大切なものは何かを映画は問いかけている。

The Golden Cup—The Legacy

「これを持っていると幸せになれる。ただし、中のお金を決して使ってはいけないよ」。チベット人から金の壺を受け取った少女は、生涯その壺を大切にし、豊かに暮らした。ある日、子孫がそのお金を知らずに使ってしまい、「自分の手で作った食事を食べた者は皆死ぬ」という呪いをかけられる。

『The Golden Cup—The Legacy』は、リンジン・リンジンの短編小説『幸運の護符』（Talisman of Good Fortune）をベースに製作された一六〇分の長編作である。六世代にわたる呪われた一族の女たちの人生を描く壮大なドラマだ。呪いは五世代にわたり、代々女性にのみ受け継がれた。一族の女が愛した男はみな姿を消した。女たちは、金の壺が血を求めると誰かを生贄にしなければいけないという宿命を背負っていたのだ。

呪いのことを知らずに育ったラモは、シリンのプロポーズを受け、周囲の反対を押し切って同棲を始める。ラモの宿命を知ったシリンは彼女に別れを告げ、別の女性と一緒になった。ラモは、裏切ったシリンと新しい家族に復讐を誓い、呪いの力を受け継いだ。彼女は人生のすべてを邪悪な力に注ぎ込み、復讐を果たすが、心は晴れず、孤独感に苛まれる。

ラモとシリンの間には女の子がいた。少女は恋をし、青年と一緒になることに決める。青年は、呪われた娘であるとすべて承知の上で一緒になり、二人は呪いの力が及ばない遠くへ逃げる。「この子に呪いがわたる前になんとかしなければ……」。ラモは呪いの連鎖を断ち切るべく、母と祖母を部屋に閉じ込め、金の壺を抱いて火をつける。

迷信深いブータンの村には「シャーマン」（呪術師）が住むとされる。村に禍や疫病が流行ると、邪悪な力を持つとされる「シャーマン」のレッテルを誰かが貼られ、スケープゴートとなった。この映画は、カルマ、シャーマニズム、輪廻転生の思想を根底に、迷信深い村人たちの言動や思想を浮き彫りにする。

ブータン映画に見るムラの暮らしと思想

ブータンの結婚観は、日本の平安時代の通い婚に似ている。ブータン西部は女系社会であり、土地は長女に受け継がれる。夜這い（ナイトハンティング）の文化が残るブータンでは、恋人たちが逢い引きする。お祭などの時にしめしあわせて、女性は夜にそっと戸をあけておく。この場面でたいていインドのボリウッド映画の影響を受けた踊りのシーンが入る。あざやかな衣装で結婚式を挙げるというのはモダンな発想で、ほとんどは男が女の元に通うようになり、いつの間にか一緒になっているものだ。婿入りといっても、ブータンには苗字がなく、「家」の概念は薄い。離婚率も高く、一夫多妻ならぬ一妻多夫の例も村部では残っている。村の親戚関係は実に複雑であるが、親戚の子であれ、友人の子であれ、子どもをかわいがり面倒をみるのがブータン人の人情なのである。

ブータンで国王に並ぶ権力をもつのが宗教指導者である。リンポチェやラマが亡くなると、弟子たちが輪廻転生した生まれ変わりの子供を探し出す。『Travellers and Magicians』は、リンポチェ自らが仏教思想を織り込んだ映画を監督したことで話題となった。

仏教の教えでは、この世で施したすべての行いは、たとえ生まれ変わっても必ず返ってくる。理不尽に見える宿命も、すべてはカルマなのだ。天の采配に疑問を抱かず、すべてに感謝し、在るがままに受け入れることを説く。お葬式を派手にあげるが、墓はない。生まれ変わりを信じているので祖先を祭ることもないのだ。「生まれ変わっても会いたい」とは、恋人たちの決まり文句である。

写真４　水牛と労働力を提供しあう共同作業

仏教と同時にブータン人の思想に深く影響しているのがアニミズム、シャーマニズムだといえる。ブータン人は土地の神様を畏れ敬い、呪術に救いを求める。食事の前には呪いを唱えながら酒やご飯などをばらまき、大地の神様に供物を捧げる。経文を印刷したカラフルな旗「ルンタ」（風の馬）が軒先や橋の上で風にそよぐ。峠には賽の河原のように積み上げられた石が並ぶ。ブータンの村には至る所にスピリチュアルなシンボルがちりばめられ、不思議な魔力を持つ世界に迷い込んだような錯覚に陥る。シャーマンは呪術師であると同時に、漢方・薬草の知識をもつ伝統医師でもある。村には病院がなく、町まで歩いて片道二～三日かかる例も少なくない。シャーマニズムは映画の世界のみならず、今でもブータンの村の暮らしに息づいている。

集落での共同作業は交換労働（Exchange Labour）と呼ばれている。田植えの時期には持ち回りで水牛や労働力を提供し合い、一か月かけて集落内の田を耕す（写真４）。集落が所有する森は共同で手入れをする。誰かが新居を構える際は、交換労働の終了後、手伝ってくれた人たちに御馳走をふるまう。機械を導入した方が早く安あがりかもしれないが、共同作業がなくなれば人と人との絆は弱くなり、コミュニティが弱体化してしまう。足並みをそろえて動く視野の狭い村人たちを苛立たしく眺める役人ドンドゥップは、現代社会に生きるブータンの若者の象徴である。進化か保守か、ブータン社会は変容への警戒を抱えている。

幸せの国ブータンに一度は行ってみたいというのは、映画にでてくる青い鳥を探しに旅に出た二人の男性と同じではないか。「欲望は苦痛をもたらす」と監督であるジャムヤン・ケンセー・リンポチェは説く。隣の芝生は青く見えるものだ。幸せの秘訣は、「足るを知る」ブータンのシンプルな暮らしと、人との絆を大切にする心にあるのではないだろうか。

◉参考文献

歌川令三（二〇〇六）「小国の地政学：秘境・ブータンはなぜ滅びないか」『東京財団研究報告書』。

大岩圭之助ほか（二〇〇八）「ＧＮＨ：豊かさという概念を問い直す」明治学院大学国際学部付属研究所『研究所年報』第一一号四。

映画『Travellers and Magicians』公式サイト（http://www.travellersandmagicians.com/）。

映画リスト――――――――――――――――――――――――

『The Golden Cup―The Legacy』……①The Golden Cup―The Legacy、②シリン・ウォンゲル、③二〇〇六年、④ブータン、⑤ゾンカ語、⑥劇場公開、ＤＶＤ販売。

『Travellers and Magicians』……①Travellers and Magicians、②ケンセー・ノルブ、③二〇〇三年、④ブータン、⑤ゾンカ語、⑥劇場公開、ＤＶＤ販売。

著者紹介――――――――――――――――――――――――

①氏名……前田知里（まえだ・ちさと）。

②所属・職名……伊根町地域整備課。

③生年・出身地……一九八一年、京都府。

④専門分野・地域……有機農業・ブータン。

⑤学歴……ワーゲニンゲン大学有機農業研究科（アグロエコロジー専攻）修了。

⑥職歴……インドの研究所 Ashoka Trust for Research in Ecology and the Environment（ATREE）とＥＵとの共同研究で半年間「有機農業の環境影響評価プロジェクト」に従事。ブータン政府ＧＮＨ委員会からの招請を受け、ジャムヤン・ケンセー・リンポチェが主導するブータン初のローカルＮＧＯ、Samdrup Jongkhar Initiative（SJI）で半年間有機農業の普及・調査に携わる。

⑦現地滞在経験……インドのオーガニック運動を先導するヴァンダナ・シヴァ博士の農場ナブダニア（Navdanya）でブータンの先進農家二〇名とともに研修を受ける。

⑧研究手法……インド（ナブダニアの研究者）・カナダ・日本の国際チームで約三〇の村を訪問し、インタビューを行った。有機農業の調査と普及を同時並行で行う国家プロジェクトであったため、利用可能な資源や有機農業の課題などを分析しつつ、その集落の現状に合わせたトレーニングを実施するというアクション・リサーチであった。

⑨所属学会……日本有機農業研究会。

⑩研究上の画期……ブータン政府はＧＮＨ向上を目的として国土全体を一〇〇パーセントオーガニックに変えるという声明を発表した。これをうけ、ＧＮＨ委員会は有機農薬の研究者を全世界に公募した。

⑪推薦図書……特になし。

⑫推薦する映画作品……『Unmistaken Child』（ナティ・バラツ監督、二〇〇八年、イスラエル）。リンポチェの生まれ変わりを探す旅に出た弟子の旅路を追うドキュメンタリー映画。